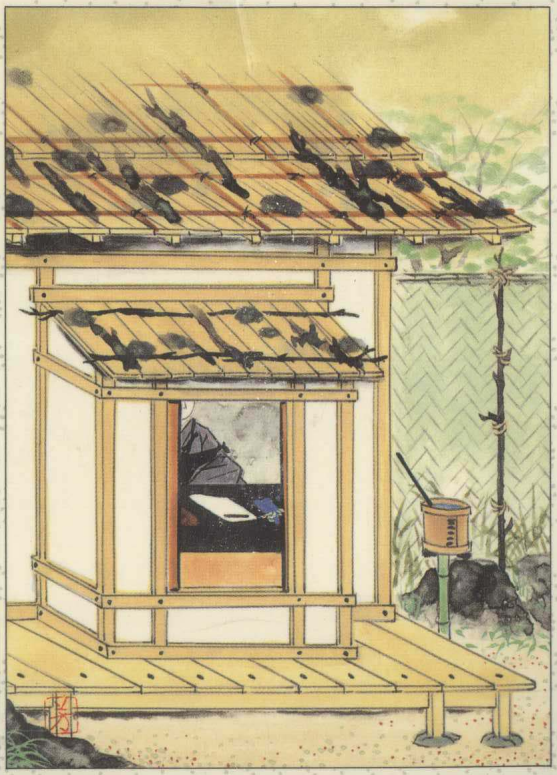
親鸞（二）



吉川英治歴史時代文庫 12

吉川英治歴史時代文庫 12
親鸞(二)
一九九〇年八月十一日第一刷発行

著者——吉川英治
発行者——野間佐和子
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一
郵便番号一一二—〇一
電話 東京(〇三)九四五—一一一一(大代表)
印刷——凸版印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。
定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan ISBN4-06-196512-3
©吉川文子 一九九〇(文2)

講談社

江苏工业学院图书馆
親鸞藏
東洋歷史時代文庫
12

目次

女人篇 7
大盗篇 110
恋愛篇 171
同車篇 262
法敵篇 308
註解 414
忍法という言葉　山田風太郎 420
浄土真宗出身の牧師として見た親鸞　佐古純一郎 422

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

親

鸞

（二）

女人篇

風水流転

一

暗黒の大蔵の中から光のなかへ、何ものかを自分はつかんで出たと信じた。五ヵ月ぶりで*一切経の中から世間へ出た時の範宴のよろこびは、大きな知識と開悟とに満たされて、肋骨のふくらむほどであった。

（もう何ものにも迷うまい）彼は、信念した。

（もう何ものにも挫けまい）彼は足を踏みしめた。

そして心ひそかに、

　我れこの世を救わん

の釈尊の信願をもって自分の信願とし、雪の比叡へ三度目にのぼったのである。

仏祖釈迦如来は、大悟の眼をひらいて雪山を下りたという。彼は、新しい知識に信を

かためて伝統の法城へ勇躍してのぼってゆく。

どのくらいな心力と体力のあるものか、範宴は、不死身のように死ななかった。骨と皮ばかりになって、しかも、麓への道さえ塞された雪の日に、

「範宴じゃ、今帰った――」と、一乗院の玄関へふいに立った彼のすがたを迎えて、覚明も性善坊も、

「あっ……」と驚いたほどであった。

休養というような日はそれからも範宴には一日もなかった。おそろしい金剛心である、彼はその冬を華厳経の研究のなかに没頭して、覚明や性善坊と、炉辺に手をかざして話に耽ることすらない。

そうした範宴の日々の生活をながめて、覚明はある時、しみじみと、

「命がけということは、武士の仕事ばかりと思うていたが、どうして、一人の凡人が、一人の僧といわれるまでには、戦い以上な血みどろなものじゃ」と、心から頭を下げていうのであった。

翌年の五月の下旬であった。難波から京都の附近一帯にわたって、めずらしい大風がふいて、ちょうど、五月雨あげくなので、河水は都へあふれ、難波あたりは高潮が陸へあがって、無数の民戸が海へさらわれてしまった。

そういう後には必ず旱がつづくもので、疫病が流行りだすと、たちまち、部落も駅路も、病人のうめきにみちてしまった。都は最もひどかった。官では、施薬院をひらい

て、薬師だの*上達部だのが、薬を施したり、また諸寺院で悪病神を追い退ける祈禱などをして、民戸の各戸口へ、赤い護符などを貼りつけてしまったけれど、旱にこぼれ雨ほどのききめもない。

犬さえ骨ばかりになって、ひょろひょろあるいている。町には、行路病者の死骸が、乾物みたいにからからになって捨てられてあったり、まだ息のある病人の着物を剝いで盗んでゆく非道な人間だのが横行していた。

突然、召状があって、範宴は叡山を下り、御所へ行くあいだの辻々で、そういう酸鼻なものを、いくつも目撃した。

（ああ、たれかこの苦患を救うべき）若い範宴のちかいは、心の底にたぎってきた。

二

なんのお召しであろうか。

庁の中務省へゆくまでは範宴にも分らなかったが、出頭してみると、意外にも、*奏聞によって、範宴を少僧都の位に任じ、東山の聖光院門跡に補せらる――というお沙汰であった。叡山では、またしても、

「あれが、少僧都に？」と、わざとらしく囁いたり、

「二十五歳で、聖光院の門跡とは、破格なことだ。……やはり引き人がよいか、門閥がなくては、出世がおそい」などと羨望しあった。

试读结束：需要全本请在线购买：www.er

彼らの眼には、位階が僧の最大な目標であった。さもなければ勢力を持つかである。そして常に、武家や権門と対峙することを忘れない。

たれが奏聞したのか、範宴は、それにもこれにも、無関心のように見える。どんな毀誉褒貶もかれの顔いろには無価値なものにみえた。ただ、さしもの衆口も近ごろは範宴の修行を認めないではいられなくなったことである。一つの事がおこると、それについて一時はなんのかの蟬のように騒ぎたてても、結局は黙ってしまう。心の底では十分にもう範宴の存在が偉なるものに見えてきて、威怖をすら感ずるのであるが、小人の常として、それを真っ直にいうことができないで、彼らは彼ら自身の嫉視と焦躁でなやんでいるといったかたちなのである。

翌年秋、範宴は、山の西塔に一切経蔵を建立した。

（他を見ずに、諸子も、学ばずや）と無言に大衆へ示すように。

無言といえば、彼はまた、黙々として余暇に刀をとって彫った弥陀像と、*普賢像の二体とを、彫りあげると、それを、無動寺に住んでいた自身のかたみとして残して、間もなく、東山の聖光院へと身を移した。

東山へ移ってからも、彼の不断の行願は決してやまない。山王神社に七日の参籠をしたのもその頃であるし、山へも時折のぼって、根本中堂の大床に坐して夜を徹したこともたびたびある。

彼が、その前後に最も心のよろこびとしたことは、四天王寺へ詣って、寺蔵の聖徳太

子の勝鬘経と法華経とを親しく拝観した一日であった。

太子の御聖業は、いつも、彼の若いこころを鞭打つ励みであった。初めて、その御真筆に接した時、範宴は、河内の御霊廟の白い冬の夜を思いだした。

「あなたは、聖徳太子のご遺業に対して、よほど関心をおもちとみえる。まあ、こちらでご休息なさいませ」そばについて、寺宝を説明してくれた老僧が気がるに誘うので、奥へ行って、あいさつをすると、それは四天王寺の住持で良秀僧都という大徳であった。

この人に会ったことだけでも、範宴にとっては、有益な日であったし、得難い法悦の日であった。

この年、鎌倉では、頼朝が死んだ。そして、梶原景時は、府を追われて、駿河路で兵に殺された。武門の流転は、激浪のようである。法門の大水は、吐かれずして澱んでいる。

正治二年、少僧都範宴は、東山の山すそに、二十八歳の初春をむかえた。

時雨の罪

一

この春を迎えて、聖光院の門跡として移ってからちょうど三年目になる。

門跡という地位もあり、坊官や寺侍たちにも侍かれる身となって、少僧都範宴の体は、おのずから以前のように自由なわけにはゆかなくなった。時には省みて、

（このごろは、ちと貴族のような）と聖光院のきらびやかな生活を面映ゆくも思い、（狎れてはならぬ）と、美衣美食をおそれ、夜の具の温まるを懼れ、経文を口で誦むのをおそれ、美塔の中の木乃伊となってしまうことを懼れたが、門跡として見なければならぬ寺務もあり、官務もあり、人との接見もあり、自分の意見だけにうごかせない生活がいつの間にか彼の生活なのであった。

「お牛車の用意ができました」木幡民部が手をついていう。

民部というのは、範宴が門跡としてきてから抱えられた坊官で、四十六、七の温良な人物だった。

範宴は、すでに外出の支度をして、春の光のよく透る居室の円座に、刃もののように衣紋のよく立っている真新しい法衣を着、数珠を手に、坐っていた。

こういう折、朝夕に見る姿でありながら、坊官や侍たちは、時に、はっとして、（ああ、端麗な）思わず眼がすくむことがある。

実際、このごろの範宴は、ひところの苦行惨心に痩せ衰えていたころの彼とはちがって、下頰膨れにふっくらと肥え、やや中窪で後頭部の大きな円頂は青々として智識美とでもいいたいような艶をたたえ、決して美男という相では在さないが、眉は信念力を濃く描いて、鳳眼はほそく、眸は強くやさしく、唇は丹を嚙んでいるかのごとく朱い。そして近ごろはめったに外出もせぬせいか、皮膚は手の甲まで女性のように白かった。

だが、ふとい鼻骨と、頑健な顎骨が、あくまで男性的な強い線をひいていた。肩は磐石をのせてもめげないと思われるような幅ひろく斜角線をえがき、立てば、背は五尺五寸のうえに出よう、ことに喉の甲状腺は、生れたての嬰児の、拳ほどもあるかと思われるほど大きい。

この端麗で、そして威のある姿が、朝の勤行に、天井のたかい伽藍のなかに立つと、大きな本堂の空虚もいっぱいになって見えた。

口さがない末院の納所僧などは、

「御門跡のあの立派さは、どうしても、童貞美というものだろうな」などと囁き合った。

けれど、師の幼少から侍いている性善坊は、どうしても、

「だんだん、母御前の吉光さまに生き写しだ」と思えてならない。

ただ、濃い眉、ふとい鼻ばしら、嬰児の拳大もある喉の男性の甲状腺――それだけは母のものではない、強いて血液の先をたずねれば、大曾祖父源義家のあらわれかもしれない。

「では、参ろうかの」民部の迎えに、その姿が、今、円座を立って、聖光院の車寄せへ出て行った。

ちょうど松の内の七日である。範宴は、網代牛車を打たせて、青蓮院の僧正のもとへ、これから初春の賀詞をのべにゆこうと思うのであった。

二

供には、いつものように、性善坊と覚明との二人が、車脇についてゆく。

牛飼の童子まで、新しい布直垂を着ていた。

慈円僧正の室には、ちょうど、三、四人の公卿が、これも賀詞の客であろう、来あわせていて、

「御門跡がおいでとあれば――」と、あわてて、辞して帰りかけた。慈円はひきとめて、

「ご遠慮のいる人物ではない。初春でもあれば、まあ、ゆるりとなされ」といった。範宴は、案内について、

「よろしゅうございますか」蔀の下からいった。

「よいとも」僧正は、いつも変らない。

範宴も、ここへ来ては、何かしらくつろいだ気がする。僧正のまえに出た時に限って、童心というものが幾歳になっても人間にはあることを思う。客の朝臣たちは、

「は……。あなたが、聖光院の御門跡で在すか。お若いのう」と、おどろきの眼をみはった。

「おん名はうかがっていたが、もう五十にもとどく齢の方であろうと思っていたが」べつな一人も同じような嘆声を発すると、僧正はそばから、

「ははは、まだ、見たとおりな童子でおざる」といった。

「御門跡をつかまえて、童子とは、おひどうございます」

範宴は、師の房のことばに、何か自分の真の姿をのぞかれたような気がして、

「師の君の仰っしゃる通りです」と、素直にいった。

僧正は、相かわらず和歌の話へ話題をもって行った。そして、

「初春じゃ、こう顔がそろうては、歌を詠まずにはおれん。範宴も、ちかごろは、ひそかに詠まれるそうな。ここに在す客たちも、みな好む道――」と、もう手を鳴らして、硯を、色紙を、文机をといいつける。客の朝臣たちは、

（はて、どうしよう）というように、当惑そうな眼を見あわせた。そのくせ、青蓮院の歌会には、いつも、席に見える顔であり、四位、蔵人、某の子ともあれば、公卿で歌道のたしなみがない人などはほとんどないはずである。何を、眼まぜをしているのだろう

试读结束：需要全本请在线购买： www.er